

之を要するに、此の貨幣は西紀七五九—七七九年に亙りて位に在りたる牟羽可汗の時代に鑄造せられたるものは認む可らずして、却りて其の質の上より考ふる時は、回鶻が天山地方に移りたる後、長き時日を経たる時のもつと見ざる可らず。

以上所謂回鶻文字なるものが、回鶻人によりて用ゐらるゝに至りしは、其の漠北の根據地を去りて、高昌地方に移りたる以後の事ならざる可らざるを論述せり、然も此の論結は此の文字の製作が何れの時代に在りや、又其の製作が何人によりて成されたるものなりやとの問題とは全く別個にして、混同すべきにあらず、單に回鶻文字の名稱より之を考ふれば、此の文字を創製したるものは回鶻人にして、從て其の創製せられたる時代は、回鶻人が初めて此の文字を使用したる時、即ち前に述べたる所によれば、九世紀の後半以後のことと見ざる可らざるが如きも、然も此の名稱は、要するに後世の命名にして、曾て之が回鶻人に用ゐられたるが爲に與へられたるものに止り、決して回鶻人の製作に係はることを指示するものには非ず、余輩の見る所を以てすれば、此の文字は回鶻人に先立ちて既に同じトルコ族中の他の部族によりて用ゐられたるものなるが如し、之更に次章に於て詳論せんとする所なり。

第三章 回鶻文字の製作と其の系統

第一部 ネストル教徒がシリヤ文字より製作せりとの説

回鶻文字は東方に來れるネストル教徒が彼等の用ゐたるシリヤ文字より作製したるものなりとは從來最も普通に

